



# 箱入少女

VIRGIN TOFFILOFF

春風栞

illustration・じろう  
原作・クレージュA



ぶちばら文庫

オマンコの形を確かめるように、  
執拗に割れ目を弄る。

本物のお嬢様の処女オマンコは最高だ。  
ふふ……ここにぶち込むのが「理想」として、  
股間がどんどん熱くなってる……。

キレイな色をしたオマンコには、  
当然、汚れを知らない証である処女膜がある。  
真正正銘の処女膜か……んっ……  
処女膜の味、もっと味わわせて貰おうか

プロローグ	冷めた男と箱入少女……	5
第 1 章	畏と純真……	12
第 2 章	白く汚されたお嬢様……	47
第 3 章	快樂人形……	96
第 4 章	育む愛……	166
エピローグ	旅立ち……	244

「は、はい……」

ユキノはおっかなびっくりな感じで、肉棒を再びその手に握った。

柔らかな指先の感触と手のひらの体温を感じるだけで、気持ちがいい。

「あ、あの……こ、こんな感じで……いいですか？」

「あ、ああ……いいよ……そのまま手でしごいて……」

「は、はい……先生……」

言葉に従って、ゆっくりと手を上下に動かし始める。

「せ、先生……これで……いいですか？」

「いい……すごく気持ちがいいよ……桐原」

「こうしたら……男の人って、気持ちいいんだ……」

「ああ、そうだよ。桐原は上手だな」

その言葉にユキノの頬が赤みを増してゆく。



「じよ、上手って……そ、そんな……私は……」

そんなウブな反応に、更に興奮が煽られる。

お嬢様の指に包まれて、肉竿は徐々に固くなってゆく。

「あつ……なんか……すごく熱くなって……ビクビクして……」

「気持ちがいいと……そうなるんだよ。いいから、そのまま続けて」

「は、はい、先生」

素直にそう答えたユキノは、肉棒をシコシコと手でしごき続ける。

「いいよ……桐原……あつ……ああ……」

「せ、先生……」

気持ちよさそうにしている姿を見て、少し安心したのかユキノは表情を和らげた。

そして若干余裕が出来たのか、手にしたモノをマジマジと見つめる。

「これが……男の人の……お、おちんちん……なんだ……」

「ああ、そうだよ。これで男は女性を気持ちよくさせたり、種付けしたりするのさ」

「た、種付けって……」

ユキノは思わず握ったペニスから目を逸らした。その反応がまた、可愛らしい。

本物のお嬢様ならではの反応に正義は満足した。

「ふふ……あまり見る機会など無いだろうから、しつかり見ておくんだぞ？」

「あつ……は、はい、先生」

手コキをさせながら保健体育を教えているような気持ちになる。何も知らない少女に、性を教え込むことほど楽しいことはない。

「こ、こんなに熱くなって……どんどん大きくなって……男の人のおちんちんって……こんなに変わっちゃうんだ……」

「ああ、興奮すると、どんどん大きくなって固くなるんだよ」

「ほ、本当だ……す、すごく……か、固い……」

触っているうちに、男性器にも慣れてきたようだ。

——そろそろ、本格的に奉仕して貰うとするか。  
いよいよ、お嬢様のフェラチオを味わうときが来たのだ。柄にもなく正義は興奮してしまっていた。今までに多くの女子生徒を手にかけてきたのに、やはりユキノは別格だった。

「桐原……次は口で啗えてくれないか？」

「えっ？ く、口で……ですか？」

「ああ、そうだよ。桐原の可愛いお口で啗えて欲しいんだ」

「で、でも……口で啗えるなんて……」

さすがにペニスを口で啗えることには抵抗があるのか、困惑の表情が浮かぶ。  
取り繕うことを知らない箱入りのお嬢様は、すぐに顔に感情が出るのだ。

だからこそ、手に取るように心理がわかる。そして同時に、そういうときの対処法も正義にはよくわかっていた。

「イヤならいいんだ……桐原……」

「えっ……？　せ、先生……？」

「……やっぱり無理だよな。口で啜えて欲しいだなんて……そんなことできないよな。汚らしく思ってるだろう？」

「そ、そんなっ！　私は、そんな汚らしいなんて……思ってないです」

「いや、そんな無理をしなくてもいいんだ。いやだったら、もう終わりにしよう」

そう言っつてわざとこちらが引いてゆけば、

「い、いやじゃないです。先生のなら……わ、私……」

想定通り、ユキノは自らを犠牲にしてゆくのだ。

「……じゃあ、口でしてくれるのか？」

「は、はい……やります」

ユキノは自分に言い聞かせるようにそう言うのと、股間に顔を近づけ反り返った肉塊をおそるおそる口に含んでいった。

「んっ……んんんっ……」

「あっ……ううっ……」

生温かい感覚が、ペニスを包み込んでくる。

その感触に思わずゾクゾクしてしまうほどの。

生粋のお嬢様が、自分のペニスを口に含んでいる。それだけで、テンションが上がるというものだ。

「むううっ……んっ……んんっ……」

しかし、啜えたまま動く気配はまるでない。

むしろ、困惑した表情でこちらを見つめてくる。

「うっ……ううっ……」

「ああ、そうか」

啜えろとは言ったが、それ以上のことは何も指示していないのだ。

何も知らないお嬢様には一から教え込まないといけない。

「うぐうぐっ……うっ……むうう……」

やはり、やり方を教えない限り、ここから先には進みそうもなかった。



どこまでもお嬢様なのだ。だが、それがいい。

「桐原……これから俺が言う通りにするんだぞ」

ユキノは肉棒を咥えながら小さく頷いた。

「そのまましゃぶって……唇でしごくようにしながら、舌で舐め回すんだ」

「ふぁ、ふぁひっ……んっ……んんっ……」

「そうだ……それでいい……うっ、うううっ……」

「あっ……うっ……くっ……んんっ」

かなり動きはぎこちないが、それだけに新鮮な感覚がある。

やはりお嬢様は、これぐらいぎこちない方がいい。

「んっ……んんんっ……むっ、うううん」

まるでテクニクなど無い、戸惑いがちの舌使いだが、それがたまらなく良い。

「いいぞ……いいぞ……あああ、気持ちいい……」

「うむうっ……んっ、んんっ……あふっ……むうう……んじゅる」

「ゆっくりしゃぶったり……速くしゃぶったり……色々試して欲しいな……桐原」

「あふっ……わ、わかりました……先生。んっ……むううっ……んじゅる……んんんっ」

ユキノは言われたことを、早速、従順に実行する。

試行錯誤しながら、口に含んだペニスを舌を絡めしごいてゆく。

こういうところにも桐原ユキノの生真面目さを感じられる。

「ああ……いいぞ……すごくいい感じだ……くっ……うううっ……その調子だ」

「んちゅ……んっ、んんっ……ふうむっ……べちゃや……む、うううっ……」

裏筋を舐め上げるような舌の動きは、なかなか悪くない。

「……んっ、んんっ……あふっ……せ、先生……こんな感じでいいでしょうか？」

「ああ、そのまま続けて……」

「は、はい……うむっ……うっ……んんんっ……んちゅ……むうう……」

ゆっくりとユキノの頭が上下する。

その度に、まるでアイスクャンディーでも舐め回すかのように舌が動いてゆく。

本物のお嬢様の舌は今までのどの女よりも、柔らかかった。

「うむううっ……んぐんぐっ……むっ、ううんっ……んじゅる……んちゅんちゅ……」

口からしゃぶる音が漏れると、場が淫らな雰囲気包まれてゆく。

反り返ったペニスが唾液にまみれててらと光り、肉竿は血管が浮き上がってビクン

ビクンと痙攣し始めていた。

「あうっ……先生の……すごく、脈打ってる……んっ……んんっ……」

「気持ちいいから……そうなるんだよ。桐原のフェラチオが……だんだん上手くなってきたから……」



「んちゅっ……んっ、んんっ……んふっ……ふえ、ふえらちお……ってなんですか？」  
 「そうやって口で気持ちよくするのが……フェラチオっていうんだ。覚えておくんだよ」  
 「は、はい、先生……」

「それじゃあ……しつかりフェラチオをしてくれないか？」

「はい……ううむっ……んっ……んじゅる……んちゅ……うううっ」

促すとユキノはまた頭を振ってペニスをしゃぶってくる。慣れてきたのか、その舌使いはだんだん大胆になってきつつあった。

「んぐんぐっ……ちゅ……んっ、んんっ……んちゅ……むっ、ううううっ」

それでも上品さは残っていて、舐め上げる舌の動きはかなり丁寧な感じである。

そこらのお嬢様とは違う、生まれ持った気品というものを感じられるのだ。

「ああ……いいぞ……すぐ気持ちいいぞ、桐原……」

「せ、せんせ……んっ……むうん……んちゅ……ふむう……んっ、んんっ……」

褒められる度に、ユキノのフェラはどんどんうまくなってゆく。

純粹に、悦んでもらえるのが嬉しいらしい。

「……んっ、んんっ……んじゅる……んむうううっ……くふっ……ううううん」

肉竿に絡みつく舌の感触、そして時折吸ってくる感じには、たまらないものがある。

「むううっ……うぐうぐっ……んっ、んんんっ……せ、先生……ど、どうですか？」

「い……いいよ。でも裏側も丹念に……舐めて欲しいな……」

そう指示を出すと、ペニスを咥えたままユキノは小さく頷いてみせた。

そして、亀頭の裏筋にその柔らかい舌を這わせる。

「……んんんっ……んちゅる……んむうううっ……」

「あつ……そ、そうだ……うっ、ううううっ……」

擦れる舌の感触に、肉棒の先からは先走り汁がじわりと溢れ出てくる。

「うううっ……あふっ……な、何か……出てきてる……うむううっ……んんっ」

「き、気持ちいいと……で、出るんだ……さ、先から溢れたお汁も舐め取って……転がすように舐めて……」

「は、はい……んちゅ……んっ、むうう……うぐっ……んっ、んんっ……ど、どんどん溢

れてきます……んちゅ……うむうう」

「はあ、はあ……溢れた汁は全部舐め取ってくれ……うっ……うううっ」

「んぷっ……んむううっ……わ、わかりました……じゅる……んむううん」

ユキノの舌が汁を舐め取る度に、ゾクッとする感覚が背筋を駆け抜ける。

その感覚でまた新たな汁が、ジワリジワリと溢れ出してゆく。

「……んっ……んんんっ……ううむっ……あふっ、ううん」

「くっ……ううううっ……!!」

「んちゅっ……んっ……むううっ……んぐっ……んんっ……」  
 テクニクならもつと上手い女はいるかもしれない。しかし、ユキノのフェラにはそれ以上に感じるものがある。

この興奮は本物のお嬢様であるユキノがペニスを咥えているからだろうか？

舌使いはお世辞にも上手いとは言えない。それでも、異様な興奮が正義を包んでいた。

「あうっ……せ、先生の……すぐ……脈打って……うっ……うむううっ……」

「あっ……ああああ……桐原っ……」

「んむうううっ……ぺちやぺちやぺちや……ふむうっ、んぐんぐっ……」

「うっ……くっ！ んんっ！」

そろそろ出そうな感覚が股間に満ちてくる。そんなペニスに、舌がネットリと絡みついていた。

「……んんっ……あふっ……んじゅるる……むうう……んっ……ふううん！」

「き、桐原……くうっ……はあ、はあ、はあ……」

「んちゅる……んっ、んんっ……せ、先生の……すぐ熱くなって……ビクビクして……むううっ……んっ、んんっ！」

「あっ……ああっ……で、出るっ……うっ、くううっ……」

睨丸が熱くなって、マグマのように熱い白濁液が込み上げてくる。

もう、我慢できそうにない。

そのまま腰を突き出して、正義は迷うことなく、汚れを知らないお嬢様の口内に一気に精液を放った。

「ん、んむ、んっ……んぐっ!? むっ、ううっ！ うむうううっ!?」

いきなり口の中に出されたユキノは、驚いたように目を白黒させた。

それでも構うことなく肉棒を突き出して射精を続ける。

「ううっ、ううう、うううっ！」

「むううっ！ あううっ！ うぐうっ……ううううう！」

ドクンドクンと脈打つ度に、ユキノの口の中にザーメンが満ちてゆく。

その独特の匂いと味に、ユキノは思わず顔を歪めた。

「うぐっ……く、くるしっ……むうう……」

「まだ……だ、出すぞっ……んっ！ くうっ！」

それでも込み上げてくる感覚に従って、全ての精をユキノの口に注ぎ込み続ける。

唾液と精液が混じって、ねっとりした感触がペニスを包み込んでかなり気持ちがいい。

「うむうううっ……うっ、ううっ……ごふっ……んんんっ」

出し続けるうちに、ようやくペニスも落ち着いてきた。

一滴残らず全ての精液を口の中に出し切ったのだ。



「はああ……すごいっぱい……で、出たな……」

「うつぶつ……うっ……うむうう……！」

「ふうう……すごく良かったよ……」

満足げにそう言うのと、萎え始めた肉棒を口から引き抜く。

「んっ……んんんんっ……ううううう」

口の中の精液をどうしてよいのかわからないという感じで、ユキノは困惑した瞳で見つめてきた。

「おっと……そうか」

何も知らない純粹無垢なお嬢様が、精液をどう処理してよいかわかるわけがない。

「ぐっ……うっ……うぐっ……んんんんんっ」

頬を膨らませて精液を溜めたままのユキノに、正義はそつと囁きかけた。

「そのまま……それを飲んでくれないか」



「うっ……うううっ……」

ユキノは涙目になりながら小さく頷くと、喉を鳴らして精液を飲み始めた。

「うぐっ……んっ……んんんんっ……うつくっ……うっ……うっ……」

「そうそう。全部飲み干しておくれ」

「……ぐっ……うっ、ううっ……んぐっ……んんんっ」

懸命に飲もうと喉を上<sup>↑</sup>下<sup>↓</sup>させ続けていたが、その動きが不意に止まる。そして苦しそうな表情を浮かべ、口をもごもごさせた。

「どうした？ 大丈夫か？」

「うぐっ……な、なんだか……の、喉に……うぐっ……引っかかって……んんんっ」かなり苦しうに言いながらも、健気にも口の中の精液を全て飲み干してゆく。

「ぐくんっ……んっ……んんんんっ……あふっ……はああ……」

やつとの思いで飲み下した後も、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべていた。そんな表情を見て、正義に悪戯心が芽生えてくる。

「桐原……どんな味だった？」

かなり意地の悪い質問に、ユキノは少し考え込んで言った。

「へ、変な味……です」

その瞳は、明らかに恨めしそうな感じに見える。

ぶちばら文庫

# 箱入少女

(はこいりしょうじょ)

2011年 4月 14日 初版第1刷 発行

■著 者 春風 栞  
■イラスト じろう  
■原 作 クレージュA

発行人：久保田裕  
発行元：株式会社パラダイム  
〒166-0011  
東京都杉並区梅里2-40-19  
ワールドビル202  
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、  
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えます。

定価はカバーに表示してあります。

©SHIORI HARUKAZE ©CourregesA

Printed in Japan 2011

PP016

朝からすっぴん  
**ミルカポッド**

Milky Paradise Vol. 1 (Milkpod) is  
presented as a prequel volume  
to the growing relationship between the girls...

好評発売中

ふたなり美少女のハレンチに  
**ぴゅぴゅ**

章ごとに移り変わる、  
パラレル・イラスト!



豪華ゲスト作家: あらいぐま・三色網戸・蜜キング

ぶちばら文庫09  
蝦沼ミナミ 著  
みさくらなんこつ・他 画  
ハースニール 原作  
定価 670円 (税別)

妄想暴走!! お嬢様・伊織ちゃんの過激な日常  
**みさくらなんこつワールド全開!**







# 投稿少女

Uploading Girl's Works

ぶちばら文庫11

春風菜 著

じろう 画

クレージュA 原作

定価 670円(税別)

描き下ろしカットも  
新たに収録! (画: 牧だいきち)



好評発売中

恥ずかしい姿、  
みんなに見てほしい!



# ぷちぱら文庫は ライター&イラストレーターを募集中です!

「ぷちぱら文庫」シリーズを盛り上げる、新たな作家を募集いたします。「ぷちぱら文庫」は、ゲームノベライズだけでなく、オリジナル創作による美少女小説も刊行予定です。

応募規定は、それぞれ以下ようになります。

皆様のご応募をお待ちしております!

## 1. 募集内容

「ぷちぱら文庫」シリーズでは、美少女ゲームやライトノベルを好む読者層へ向けた作品作りを目指しています。ご応募いただく場合も、ヒロインの個性や魅力が伝わるようなもの、シチュエーションへのこだわりが感じられるものなど、はっきりしたテーマのある作品でお願いいたします。題材はとくに限定していません。発表済か、未発表作品かも問いません。

## 2. 送付方法

小説の場合は、テキストデータをメールでご応募ください。コミックやイラストは、原稿用紙をお送りいただいても、データをお送りいただいても結構です。データが5MB以上の場合は、ファイル転送サービスなどをご利用ください。コミックには枚数の規定はありません。小説は1ページを17行×40文字として、50ページ以上の作品をお送りください。

## 3. 選考結果などについて

メールでご応募いただいた場合は、着信のご連絡は必ず行っています。選考は随時行っており、締め切りはとくにございません。選考終了後、採用の方へのみ別途お返事をしております。通常はお返事までに、2週間～1か月ほどお時間がかかります。

## 4. 作品の送付先

ご郵送の場合は下記住所までお送りください。メールでのご応募は以下のアドレスで受け付けております。どちらの場合も必ず「お名前、年齢、ご職業、ご住所、電話番号」を書いた紙を同封するか、明記してください。  
メールの宛先: [desk@parabook.co.jp](mailto:desk@parabook.co.jp)

〒166-0011 東京都杉並区梅里2-40-19 ワールドビル202  
株式会社パラダイム 「ぷちぱら文庫作品応募」係

※ご応募の際の個人情報、選考結果のご連絡にのみ使用いたします。

作品のご返却を希望の場合は、宛名を書いた返信用封筒と切手を同封してください。